

栗原玉葉の《朝妻桜》に関する考察

田所 泰（東京文化財研究所）

大正期、官展を中心に活躍した日本画家・栗原玉葉（1883-1922）は、幼い少女や女性の姿を題材に多くの作品を制作した。彼女が大正7年（1918）の第12回文展へ出品した《朝妻桜》は、江戸・吉原の遊女朝妻がキリスト教を信仰した廉で捕らえられ、処刑されることに決まったものの、最期に桜の咲くのを見てから死にたいと願い、満開の桜花の下で刑に処されたという話に取材した作品である。北川久氏はおなじく朝妻を題材とした第12回文展落選作の松本華羊作品との比較を通して、玉葉の本作にはある種の諦観が読み取れるものの、神の御許へ旅立つことに確信を持った女の静謐な美しさが前面に出ていると指摘されている。また朝妻について書かれたテキストのひとつである岡本綺堂の「切支丹屋敷」を玉葉は知りながら、クリスチャンとしての誇りを持ち、戯曲とは無関係に日本画の装飾性を生かして本作を制作したのだらうと推測されている。しかしながら、玉葉自身が本作について述べている言葉からは、諦観や憂いといった表現を意図していたようすは読み取れず、実際にはどのような朝妻像を玉葉が意図し、それを描き出すためにどういった工夫を凝らしたのか、さらには玉葉の画業への位置付けなどについては未だ考察の余地がある。

朝妻について書かれたテキストは、軸となる話を基にさまざまなバリエーションが生み出されており、玉葉もまた独自の朝妻像を創造しようとしていたと考えられる。玉葉が籍を置いていた本郷教会の牧師・海老名弾正のキリスト教思想を勘案すれば、それは神を慕い憧れ、キリストのいる永遠の世界、つまり天国への入口である死を静かに待つ朝妻というものであったと推測される。そのような朝妻像を表現するために、玉葉は本作に聖母マリアの図像に見られる構図を応用し、信仰に一途なさまを表す表情をさせ、さらに画面全体に裏箔を施している。また朝妻の小袖には能や歌舞伎の演目「石橋」を想起させる意匠が施されているが、これは鑑賞者が本作の主題をより理解しやすくするための工夫であったと考えられる。キリスト教に材をとった作品は、主に歴史画として、他の画家によってもしばしば描かれている。本作もまた歴史画の範疇に入れられる作品であるが、鑑賞者を意識した工夫が凝らされるなど、より能動的な性格を有しているといえる。

当時の文展評には個性の発揮を促すものや、大衆迎合的な傾向を危惧するものが散見されるが、本作では玉葉の個性が存分に発揮され、大衆への働きかけもが意図されていた。玉葉は大正5年の第10回文展落選後、それまで主として描いていた子供の絵をあまり描かなくなり、キリスト教関連の作品や、故郷長崎に材をとった作品など、玉葉ならではの作品を多数制作している。本作はその早い例であり、玉葉が当時の文展の動向を踏まえつつ、自らの制作に新たな展開を切り開こうとしていたことの読み取れる重要な作品である。